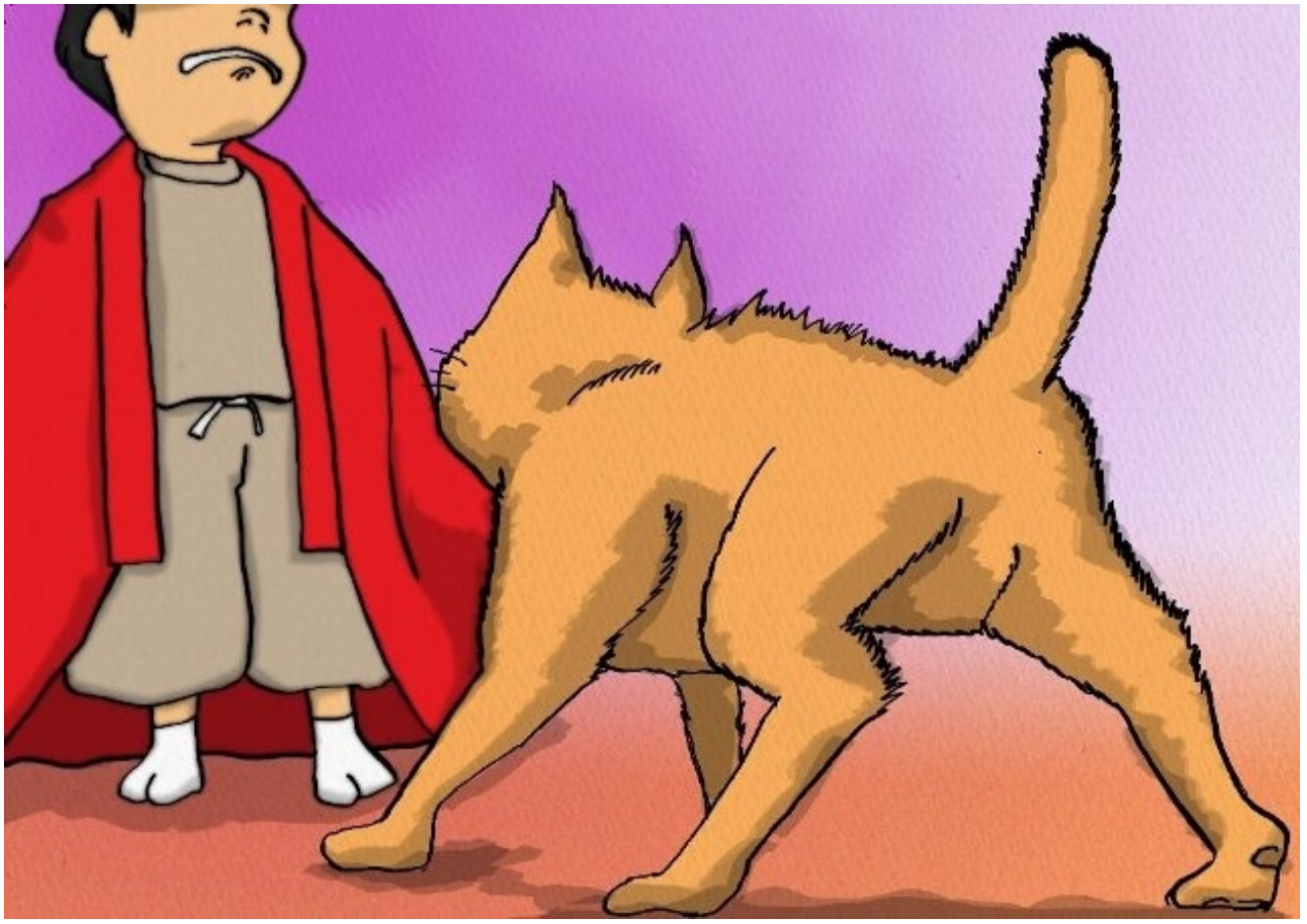
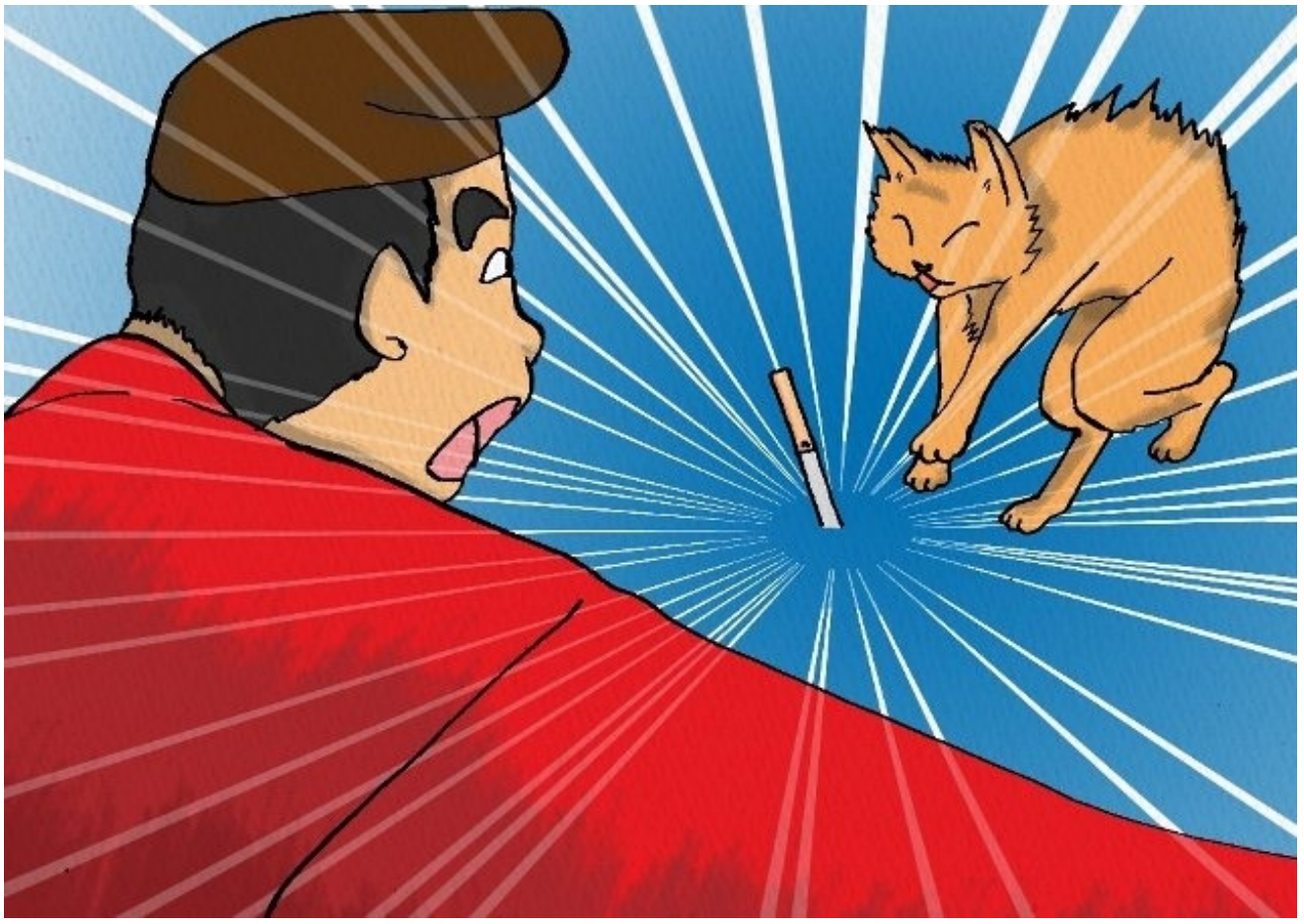
猫の宮

ここは出羽の国、高安村
庄屋様の奥方様が
青い顔をして
ため息をついております
「どうした、おみね
最近顔色が
すぐれないようだが・・・」
「じつはねあんた
　ちょっと
気味のわるいことが続いて・・・」

「外の
かわやへ行くたびに、
猫のタマがついてくるんだよ」
「なんだ、そんなことで・・・」
「そんなことじゃないんだよ、
　あたしがかわやへ入ると
尋常じゃない目で
あたしをにらむんだよ
そしてうなり声を上げるのさ、
あたしゃもう
気味が悪くて気味が悪くて・・・」
「ふうん、にわかには信じられんな
　わしにはあれほど
なつっこく
じゃれついてくるというに
よし、おみね
お前の着物をわしにかせ
試してみよう」



庄屋様はそういうと、
奥方様の着物を羽織って
かわやへと向かいました
するとどこからか
猫のタマが現れました
どれどれと様子を見てみますと
確かにいつもの
かわいらしいタマではありません
背中の毛を逆立たせ
フーフーとうなりを上げ
目を吊り上げて
こちらをにらみつけます
そしてかわやへと歩みを進めるほどに
タマの気性は
ますます荒くなっていくのでした
その姿に庄屋様は
ムカムカと腹がたってきました



「観音様のお参りの
帰りに拾った猫だから
　大事に飼ってやっているというに
　いったい何が
気に入らないというんだ
　そのように
気を荒げるというなら
　屋敷から出ていけぃ！」
そういうと庄屋様は
懐の小刀を
タマに投げつけました
タマは驚いて
後ろへと跳ね飛びました
するとそのときです

何かが
庄屋様の背中へ
どさっと落ちてきました
「うわっ！　なんだなんだ？」
庄屋様はあわてて
それを払いのけようとしましたが
ひんやりと冷たいそれは
庄屋様の体に
スルスルとまとわりつき
からみついて
ついには体中を
ギリギリと締め上げました

庄屋様
の体にまとわりついたもの
その正体は気味の悪い色をしたヘビでした
「ふむ、あの女かと思ったら
　まぁいい　この際きさまでもかまわん」
「ひぃっ！　ナ、なんだお前は？」
「ふふふ、冥土の土産に教えてやろう
　俺様は数十年前
この村で無残に殺された
タヌキの生まれ変わりよ」
「あ、あの犬の宮の話の・・・」
「ふん！　いまいましい坊主と犬どもよ
　おかげでもとの体に戻るまで
　こうして人間の
精気を吸い続けなければならん
　しかし、きさまのおかげで
一気に回復しそうだ
　あの猫を追い払ってくれて礼を言うぞ」
「・・・そ、そんな・・・」
「さぁ、骨になるまで
精気を吸い取ってやる！

覚悟を決めろ」
「ひいっ・・・！」

と、そのときです
「みゃうっ！」
とタマが飛んできて、
ヘビの頭を
鋭いつめで引っかきました
そしてそのつめで
必死にヘビにしがみつくと
その牙でヘビに噛み付きました
「うわっ！　くそっ！　なにをっ！」
驚いたヘビから力が抜けました
庄屋様はあわててヘビを
振り払い逃げ出しました

「おのれこしゃくな真似を！」
怒ったヘビは
タマに向かって襲い掛かりました
タマはあちらへひらり、
こちらへひらりと逃げますが
ついにヘビの牙が
タマを捕らえてしまいました
ヘビの毒を受けて
ふらふらになったタマに
ヘビは絡みつき
力いっぱい締め付けました
「ぎみゃーーーーーーぁあぁぁぁぁあ・・・・」
タマは悲鳴を上げ、
がくりと頭を垂れました
「んふ、ふはは、どうだ、畜生が・・・」
ヘビが勝利を確信し
頭を上げたそのときです

グサアァッ
と小刀がヘビの頭に突き立ちました
「か、かかっ・・・かっ」
ヘビの目にうつったのは
憤怒の形相をした庄屋様でした
「タマの！　タマの仇だっ！」
グサッ！　グサッ！　グサッ！
庄屋様は何度も何度も
ヘビに刀を突き立てました
ヘビはビクリビクリと
体を波打たせていましたが
ついにはピクリとも
動かなくなってしまいました

「タマよう、
お前はヘビから
オラたちを守るために
　ああしてうなり声を
立ててくれていたのだなぁ
すまねぇ、すまねぇ・・・」
庄屋様はタマのなきがらを抱いて
泣きながら
何度も何度もあやまりました
そうして庄屋夫婦は
タマを手厚く葬り
猫の宮というお堂を建てて
タマの霊を祭ったというそうです

解説

犬の宮の話から約７～８０年後のお話といわれています。
大筋は原作どおりですが紙芝居演出のため若干変えた点があります。
元の話では庄屋様が猫の首を小刀でちょん切っています。
猫の首だけが便所の屋根裏へ飛んでいき、
バタバタ音がした後、屋根裏をのぞいてみると
猫の首だけがヘビの死体に噛み付いているのを発見するという
グロくてホラーなお話になっています。
死んでしまうにしても猫ちゃんの生首は描きたくなかったので
このような演出にしました。
犬の宮でも書きましたが戦いのシーンの可視化と人間とネコとの協力、
これをテーマとした演出です。